

地方文化振興の担い手としての地方文化人の役割 —吉田正太郎における「余技」と柳宗悦との交流—

The Role of Local Cultured Persons in Regional Culture Promotion

梶谷 崇*

KAJIYA Takashi

Abstract

The Mingei Movement, which was initiated by Muneyoshi Yanagi (1889-1961) in the early Showa period, spread throughout the country owing to the presence of local supporters. In previous research, these supporters have often been subordinately positioned as collaborators of Yanagi's ideas and practical activities. However, Shotaro Yoshida (1887-1971), a cultured person in Kashiwazaki, Niigata Prefecture, was involved in Muneyoshi Yanagi's practical activities with his unique view of local culture. In this study, I analyzed texts written by Yoshida in the *Echigo Times*, a local newspaper in Kashiwazaki, and reconstructed the process of how Yanagi and Yoshida met and interacted. Thereafter, I compared their beliefs and particularly examine the characteristics of Yoshida's concepts. Consequently, it was found that at the beginning of their interaction, Yoshida's concept regarding the local culture was different from Yanagi's concept of Mingei. Yoshida termed the artistic works and daily crafts that people living in rural areas produced—apart from what they produced for their livelihood—as "Yogi (hobby)." "Yogi", as Yoshida referred to, is not simply a hobby, but something that amateurs thoroughly pursue according to their sensibilities. It was an important cultural activity in the sparsely populated rural areas, which he believed would beautify rural life. He focused on the "Yogi" of ordinary people, who are different from those who create Mingei products as the bearers of local culture. Yoshida advocated the state of local culture from the standpoint of living in a local city. He respected Muneyoshi Yanagi as his teacher and supported Yanagi's activities; however, he was not simply a supporter. Yoshida, who questioned the importance of "Yogi" in local culture, played a different role as a cultured person than Yanagi.

1. はじめに

民藝運動の父、柳宗悦（1889-1961）が生涯を通して行った事業をかえりみる時、その膨大な仕事量と後世へ残した影響の大きさに加え、彼を取り巻く人脈の多彩さに驚かされる。白樺時代、武者小路実篤や志賀直哉ら多くの友と自己形成上の影響関係を持った。朝鮮において浅川伯教・巧兄弟と交流、その後民藝運動へとその活動の重心を移していくと、バーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司といった盟友が加わった。著書『工藝の道』（1927）によって柳の下に集まった棟方志功や芹沢銈介などに代表される民藝作家や工人たちも柳のもとに集まった。外村吉之介や田中豊太郎、式場隆三郎、吉田璋なども、柳の思想に共鳴しながら全国各地で民藝運動を展開していった。

途中で柳と袂を分つものもありはしたが、柳はとにかく友や弟子に恵まれた人物であった。これらの人脈なくして柳の膨大な仕事は成し得なかっただ

ろうし、後世への影響もこれらの人脈に負うところが大きい。柳宗悦研究において人脈研究は一つの重要なテーマである。

柳の人脈は中央よりもむしろ地方にこそ厚い。運動が本格的に開始する1925年以降に民藝人脈は主に形成されていくが、その中にある異色なのは新潟県の人脈である。ただ新潟人脈といっても二つの人脈ルートが存在している。一つは式場隆三郎、吉田璋也、田中豊太郎らの新潟市を中心として活動したグループであり、もう一つは吉田正太郎を中心とした柏崎の文化人グループである。

二つのグループはそれぞれ別に柳宗悦との交流のきっかけを持っているが、柳を接点として互いに交流を持つようになる。筆者はかつて新潟市のグループ、特に式場隆三郎らのアダム社に関してその交流初期の実態について明らかにした⁽¹⁾。本稿においては、もう一方の柏崎グループ、中でも柳と終生交友関係を結んだ吉田正太郎に注目して検討を加え、

柳の新潟県人脈の別の側面を明らかにする。

吉田正太郎と柳の関係に関する主だった研究資料として、『民藝』（2011年3月号、通巻699号）が「黒船館 吉田正太郎と小五郎」と題して特集を組んでいるものが挙げられる。吉田の孫にあたる吉田直一郎、黒船館館長大竹信雄、志賀直邦による文章と、柳と吉田正太郎・小五郎兄弟の往復書簡が掲載され、その交友の足跡を回想している。近親の人々による回想においては、吉田正太郎は病床においても枕頭に柳からの書簡箱を置いて何度も読みかえし、葬儀においては柳の書が掛けられたというエピソードが紹介され、吉田の柳に対する終生の友情や師弟関係が強調されている。また志賀直邦は『民藝の歴史』⁽²⁾においても吉田正太郎との交流に一節を割いて同様の記述をしている。

地方文化史の観点からは、岡村浩⁽³⁾が柏崎における文化人としての吉田の活動を、遺族、関係者からの聞き取りや、地元に残る文献資料をもとにその生涯をたどっている。他に柏崎市が刊行した『柏崎の先人たち 柏崎・刈羽の人物誌』⁽⁴⁾も吉田について一項目設けて紹介している。これらの先行資料から、柏崎における文化人としての吉田の活動の全体像が把握できる。

吉田は1887年に柏崎の呉服屋花田屋の3代目として生まれた。慶應義塾普通部（附属中学校）に進学、父親の他界によって大学は一年で退学し、郷里にもどって家業を継いだ。以後柏崎の地において、柳のみならず、川上澄生や北大路魯山人、会津八一といった文化人、芸術家らと深い交流を持った。またペリーに関する文明開化資料や大津絵、南画、川上澄生作品の日本有数のコレクターとしても知られ、これらのコレクションは現在柏崎コレクションビルジ内に開館した黒船館に収蔵展示されている。

本稿では、これらの先行文献を踏まえつつも、改めて一次資料にあたり、柳宗悦にとっての吉田正太郎という存在について検討する。吉田と柳の関係性は、式場隆三郎や田中豊太郎、吉田璋也らの新潟市人脈とは異なるものである。その背景には吉田独自の地方文化人としての思想があると考えられる。資料の分析を通して吉田正太郎の地方文化に対する思想を明らかにし、柳との交流の意味を再考したい。

2. 『越後タイムス』と「下手ものゝ美」

柳宗悦が民藝思想を初めてまとめた形でメディアに発表したのは、1926（大正15）年に発表され

た「下手ものゝ美」であるが、この文章の初出は柏崎の週刊ローカル紙『越後タイムス』（1926年9月19日）であった。柳に『越後タイムス』への寄稿を要請したのが吉田正太郎である。当時『越後タイムス』は「紙上夏季大学講座」というシリーズ記事を連載していた。7月より柏崎ゆかりの文化人が毎号連続して『越後タイムス』紙上2面にわたって独自のテーマについて論文を発表するというものである。テーマは歴史、宗教、文学、工芸の他、医学や心理など多岐にわたっていた。講師として、式場隆三郎、吉田正太郎、相馬御風、佐藤春夫といった名前が上がり、その中に柳宗悦も含まれる。

「下手ものゝ美」は当初、「将来の美術史に対する予の希望」というタイトルで予告されていた。柳は新聞掲載の直前、軽井沢の寓居でこの文章を書き上げ、吉田に送っているが、そのタイミングでタイトルを「下手ものゝ美」に変更している。柳は吉田宛9月5日付書簡（柳全集書簡番号397）において、

前便お知らせし題目は放棄。今迄書きかけて何度も何度も書き直した「下手ものゝ美」をお送りします。之は民藝美術館で出す小冊子の為に書いたのですが、草稿のつもりでお送りします。

（中略）此文は「下手もの」に対する最初の多少まとまった Expression になるので責任多く、却て自由に書けませんでした。

と書き送っている。柳が見据えた「将来の美術史」とは、下手ものを中心とした美の歴史である。それについて熟考を重ねた果てに「下手ものゝ美」という題目にたどり着いた様子が読み取れる。柳が「草稿」として書いた「下手ものゝ美」は民藝美術館のためにまとめられた最初の一文ということになる。「下手ものゝ美」はその後「雑器の美」と改称され、柳の民藝論の基調をなしていく。

柳は前年の1925年末に河井寛次郎や濱田庄司等とともに民藝という言葉を生み出し、民藝美術館設立に向かって動き出している。民藝運動の第一声として柳は1926年1月に「日本民藝美術館設立趣意書」を起草し発表しているが、「募金」の項目を見ると、柳らに資金を援助した4名のうちに、吉田正太郎、伊藤助右衛門が含まれている。吉田宛書簡（書簡番号383）によると2月5日の段階で柳は吉田から金500円の寄付を受けとったことに感謝を伝えている。吉田は運動発足当初から越後タイムス紙面のみな

らず、経済的にも、いわば物心両面から真っ先に柳に協力をしているのである。

3. 吉田正太郎と柳宗悦の出会い

ここで柳と吉田正太郎の出会いまで戻る。『越後タイムス』は、新潟県柏崎の文化人である勝田加一（忘庵）によって1912（明治45）年に創刊され、2014年まで続いた週刊ローカル紙である。当時柏崎には、勝田を中心に地元名士や文化人らのコミュニティが形成されていた。そのメンバーに吉田正太郎が含まれていた。

吉田正太郎宛の柳書簡のうち1920年7月5日付のものが最も古いものとして残されている（書簡番号276）。吉田は柳からの書簡を生涯大切に保管していたというから、二人が交流を始めたのはこの時期から大きく外れてはいないだろう。

また、1923年8月柳は佐渡への木喰上人調査の帰りに柏崎に立ち寄り吉田を訪問している。8月19日付吉田宛書簡（書簡番号317）で「東都を離れた一小市に、貴兄らの様な方々が大勢おられるのを嬉しく思いました。貴兄が中々の議論家である事は意外でした」と書き送っていることから、柳と吉田が初めて直接対面したのは、この時が初めてであったと考えられる。したがって、約4年の間、両者は書簡だけの付き合いであったということになる。

すでに触れた通り柳と吉田の交流について既往研究でも言及はあるのだが、直接対面以前の期間（1920～1923）の両者の関係について踏み込んで考察した研究は見られない。今回、改めて関連する文献資料の収集、読解を行った結果、既往研究では紹介されていない二つの証言が確認され、ある程度彼らの出会いのプロセスが明らかになった。

一つ目の証言は勝田加一が吉田に柳を紹介したというもの、二つ目の証言は糸魚川の伊藤助右衛門が吉田に柳を紹介したというものである。

一つ目の、勝田加一を介して柳宗悦と出会ったというのは、吉田正太郎自身の証言である。勝田加一が亡くなった1962（昭和37）年、『越後タイムス』（10月7日付）「勝田忘庵翁追悼号」の「記者ノート」欄に、勝田の死に面した吉田の口述が紹介されている。

私（吉田正太郎—引用者注）の知っている人はすべて勝田さんの紹介でした。柳宗悦さんをはじめとして…。毎日、毎晩、私は勝田さんと一緒にした。

お尻にくっついていました。あまり毎晩おそくまでいるので、”長ッ尻はご免に候”というお手紙までもらったことがあったほどでした。

吉田正太郎本人の証言であるから信憑性が高い。文化芸術を愛好する文化人であった吉田正太郎にとって柏崎という地方都市でその趣味を共有できる相手は限られていただろう。勝田は吉田にとって趣味を分かち合える数少ない相手であったという。岡本浩⁽³⁾も、江原小弥太による回想文にある、「（吉田が）勝田くんの許へ通ふたのは、孤独感をいやさんが為でもあった」という言葉を引用しつつ、「当時柏崎では縹亭（吉田の雅号）の相手になるのは、この方面では忘庵をおいて他にいなかった」と述べている。吉田が慕っていた勝田が先に柳と交友関係を結び、その後柳に出会ったというのが、吉田による証言から伺える彼らのつながりである。

ただ勝田が柳といつからどのように交流を始めたのかまではたどることができなかった。勝田宛柳書簡も残されてはいるが、初出は吉田正太郎宛よりも遅く、1923年12月3日（書簡番号323）である。先に吉田との初対面が1923年の柏崎においてであったとしたが、同様に勝田ともその時が初対面であった可能性もある。また勝田とのやりとりは、例えば朝鮮旅行中の柳に対する勝田からの朝鮮工芸品の代理購入依頼に関するものなど、業務的な内容が主であった。勝田が吉田と柳を結びつけたのだとしても、柳がどのようにして勝田や柏崎の人脈と結びつき、交流をしたのかはこれだけでは見えてこない。

もう一つの証言である伊藤助右衛門を介して出会ったという説を裏付けるのは、伊藤の述懐および式場隆三郎の回想による。

吉田の喜寿を記念した作品集『縹亭余技帖』⁽⁵⁾に伊藤助右衛門が寄せた「交友六十年」という回想文が掲載されており、そこで伊藤は「彼（吉田正太郎）を柳宗悦に紹介し仲介したのは、多分私がはじめてだったろうと思う」と述懐している。

式場は『越後タイムス』（1926年6月13日付）「タイムスへの寄稿に就て」という文章において、吉田正太郎らとの出会いを振り返りながら、「その後伊藤氏を通されたのか柳さんは吉田正太郎さんと知られるやうになり、弟さん（吉田小五郎）とは柳さんのお宅で二三度一緒になりました」と、伊藤助右衛門が吉田に柳を紹介したと推測する下りがある。この述懐は、先の伊藤の証言を裏付ける。

伊藤は新潟県糸魚川の北前船船主の家に生まれた。伊藤家は代々廻船業を営み、当主は助右衛門を名乗った。幕末明治の有力な北前船船主の一つであったが、明治末に北前船が衰退すると伊藤も廻船業から退き、農業経営に転じた。

伊藤と吉田は慶應義塾の普通部時代に出会っている。寄宿舎で部屋がとなり同士であったこともあるという。ともに同じ新潟出身で資産家の後継ぎであり、性格は真逆であったが、それが逆に彼ら二人の友情を長続きさせた。伊藤は振り返る。

伊藤は文学や芸術を愛好する趣味人として生きた。吉田を通じて柏崎の文化人との交流もあり、度々『越後タイムス』にも寄稿している。1917年には陶芸家富本憲吉と出会い、交流を始め、国内有数の富本コレクターとなった。富本はバーナード・リーチを介して、大正初期にはすでに柳宗悦と出会うっており、その後柳も伊藤との交流を始めている。したがって柳は吉田よりも先に伊藤との間に交友関係を持っていたことになる。

柳が1923年に発表した「失われんとする一朝鮮建築の為に」は、日本海に面した糸魚川鬼舞の伊藤邸において執筆された。当時伊藤邸に滞在していた柳宗悦が早朝、日本海を朝鮮半島の方角に望みつつ一気呵成に書いたものだという。柳は北陸への旅の途上で伊藤邸に寄宿することがあった⁽⁶⁾。

以上の証言を総合すれば、1920年頃に伊藤を通じて柳は勝田・吉田らの柏崎文化人グループと繋がるようになったと考えるのが妥当だろう。伊藤を通じずに柳は柏崎グループとの接点を持ち得ないからである。伊藤から見れば自分が柳を吉田に紹介したと捉えていただろう。ただし、柏崎グループにおいて勝田を慕って付き従っていた吉田には、まず柳と勝田の交流が先で、それに自分が加えられたものと感じていたのかもしれない。

4. 中央への対抗意識

吉田正太郎は1887年生まれであり、柳よりも2歳年長である。が、長男吉田直太によると、正太郎にとって柳はもっとも敬愛した人物の一人であった⁽⁷⁾。晩年病床にあった吉田正太郎の枕元には柳からの書簡が収められた箱が置かれ、繰り返し読み返していたという⁽⁸⁾。また吉田正太郎の葬儀において棺のそばには柳の「イザ去ナン 文ナキ里ニ」という柳の偈が書かれた一軸が掛けられていたと伝えられている^(7, 9)。

だが、このような述懐から、吉田を柳の地方の共鳴者あるいは一崇拜者と見るのは一面的である。というのも、柳との対面以前の吉田にはむしろ地方文化人として中央の柳宗悦や『白樺』に対する強い対抗意識もあったように思われるからである。そのような吉田の中央に対する対抗意識を物語るエピソードがいくつか残されている。以下、それらのエピソードを読み解きながら、吉田正太郎の人物像を浮かび上がらせたい。

エピソードの一つ目は『白樺』が「李朝号」を出した際、『越後タイムス』（1922年11月12日付）ではそれに張り合って「セトモノ号」を特集した、というものだ。吉田は特集冒頭の「セトモノ号発刊に就て」という記事を執筆している。

吉田は、一般的に中央の新聞に対して地方新聞が小規模であるために「上下尊卑の区別」がつけられることになるが、そのような風潮に対して、対抗的に以下のようなことを述べている。

私達は今茲にセトモノ号といふものを出す事にした。それは外ではなく、越後タイムスが常に出来る丈け、地方的に作られて居る事が前に云った如く動ともすると、割引的、第二義的、自卑的に考へられ易い所から、セトモノ号のやうなものを出す事によって、地方新聞も時には、又、ある一面に於ては、決して中央新聞と地方新聞との間に何時の差異のあるもので無いと云ふ事を示すと同時に、此方面に充分開拓し得る余地のある事を見せしめ度いと思ふからの試みである。

吉田はセトモノ号を出すことで、地方新聞が中央新聞となんら引けを取らないことを示したい、として地方の文化趣味に対する強調、自負、中央に対する対抗意識を見せている。

吉田は後に、『工藝』第70号（1936年10月22日発行）の「日本民藝館」特集号に掲載された「回想を語る」という一文でこのエピソードを振り返っている。

この特集号は、日本民藝館落成、開館に併せて組まれた号であり、巻頭に柳宗悦による「民藝館の使命」という文章が掲載され、民藝館の理念を高らかに宣言している。柳の文章につづき、初期民藝運動に携わった錚々たるメンバーが文章を寄せている。掲載順に、河井寛次郎、外村吉之介、柳悦孝、棟方志功、武内潔眞、式場隆三郎、内山省三、吉田正太郎、田

中豊太郎、吉田正五郎、森數樹、浅沼喜實、村山景夫、壽岳文章、水谷良一、芹澤銑介、濱田庄司が名を連ねる。それぞれ文章に長短あるが総じて民藝館開館に対する祝辞、ここに至るまでの柳の努力の足跡、今後の民藝運動発展への祈念が述べられている。

ただ、その中にあって吉田の一文は少々その傾向を異にしている点が注目される。この一文は紙面四ページを割き、十程度の柳との小さな思い出を回想する形で語られている。民藝館開館に対する祝辞というよりは、その運動からはやや距離を置いた皮肉混じりの個人的な付き合いの足跡を振り返るという形式をとっている。そこで1922年の「セトモノ号」についての言及がある。

モウ年代なんかスツカリ忘れて仕舞つて居ること勿論であるが、白樺で李朝號が出されたあと、吾々も負けずに越後タイムスで『セトモノ號』といふ奴を出した。其の時、私も一二文書かして貰った訳だが『白樺の連中は李朝でなければ世は明けぬと言ふ。勿論それはよいものではあらう。併し、李朝より何も見て居ないで、詰りロダンやブレークから始めて見たセトモノが李朝であつたと言ふ可きではないか』とか、何とか書いたことを覚えて居る。止め度もなく思ひ出すガサツの姿。

柳が『白樺』において「李朝特集」を組むのが同年の9月号である。「セトモノ号」はそのわずか2ヶ月後に特集されており、『白樺』に対する対抗意識を明白にもって企画された特集であったことがわかる。「白樺の連中」すなわち柳宗悦らに対して、ロダンやブレークから「セトモノ」に関心を広げたと云っても、結局李朝しか見ていないで「セトモノ」を語っているに過ぎないではないか、といった批判のようである。当時は吉田にそのような白樺派や柳に対する否定的な思いもあったということであろう。もっとも、この一文は逆に当時吉田は『白樺』の読者であったということを裏付けてもいる。

またその翌1923年6月3日には『越後タイムス』では「南画号」を組んでいる。それは江戸末期の柏崎の文人、高野米峰の書画を特集したものであるが、この特集を主導したのも吉田正太郎であった。高野米峰については吉田と柳との間でも何度かやりとりがあり、柳も柏崎を訪問した際に米峰の画を直接目にして感心したようである。『越後タイムス』の特集に一ヶ月遅れ、『白樺』（7月号）が東洋画を特集

した際、吉田正太郎の弟である小五郎は、『越後タイムス』が『白樺』に先んじたことを「愉快である」と正太郎に書き送った書簡が『越後タイムス』に掲載されている。中央の『白樺』を多分に意識しつつも、それに地方から対抗しようとする彼らの気概が伺われる。

最後にもう一つ彼らの関係を物語るエピソードも確認したい。前出「回想を語る」では、

大分前になる。其の頃の式場氏達の例のアダムス社に迎へられて、ある日柳氏は新潟にやって来られたことがあった。其の時、其処の新聞記者某から越後タイムス社に便りがあった。『希望なら御紹介しよう。柏崎組で先生を迎へてはどうか』と。タイムス組は其のことで寄った。其の時の私『柳宗悦の宗教哲学でもないサ。柳兼子さんなら雙手を挙げて歓迎するヨ。ハッハッハ』

と回想している。ここでいう柳宗悦の新潟来訪は1921年のものを指すと考えられる。柳は1921年、式場隆三郎らアダム社のメンバーによって招請され新潟で講演を行った。前年の1920年には柳兼子が宗悦の朝鮮文化事業に対する宣伝と寄付金募集を目的に新潟で第1回目の独唱会を開催している。1921年には柳は朝鮮の浅川巧と協力して朝鮮民族美術館設立を目標として活動を展開するようになったが、ここでいう1921年の新潟での講演会と音楽会はその設立運動の一貫として行われたものだ⁽¹⁾。

式場隆三郎も前節で取り上げた『越後タイムス』記事「タイムスへの寄稿に就て」において、当時を次のように振り返っている。

もう七年位にもなるでせう、私が新潟で柳先生と兼子夫人をお招きして、朝鮮美術の講演会と民族美術館の為めの二度目の音楽会をやった時の事でした当時新潟新聞にゐた中村和作君が来て、柏崎の越後タイムスで講演会と音楽会を開きたいそうだから心配してくれないかとの交渉を受けました。

その時私はタイムスの事をきゝ新聞も見せて貰ひました。私は欣んで承諾して柳さんに交渉しました。先生はすぐに承知して下さいました。然し奥さんは都合悪くゆけぬとの事でした。で講演会だけのつもりであたのですが、その前日位に中村君が又来て、音楽会と一緒になければ工合悪いか

らとの事で中止を申出られたのです。今から思ひだすと面白い気がします。

この式場の記述は吉田の述懐を裏付けている。式場は「二度目の音楽会」と述べているから 1921 年の音楽会であるとわかる。吉田の文中にある「其処の新聞記者某」とは中村和作であろう。式場の叙述からは、越後タイムス側が講演会と音楽会を開きたい旨を中村に申出ていることになっているが、吉田の認識では中村から柳夫妻を迎えてはどうかと打診してきたことになっており行き違いが生じている。吉田の回想からは当時、越後タイムス側では柳兼子の「音楽会」は歓迎していたが、柳宗悦の「宗教哲学」は求めていなかった。1920 年に吉田は伊藤助右衛門、勝田加一を介して柳の交流圏に含まれていたわけだが、1921 年当時の吉田ら「タイムス組」は、兼子の音楽会は歓迎しつつも、柳宗悦の講演会には興味を示していなかったようである。式場が「今から思ひだすと面白い気がします」というのは、おそらく柳と吉田の関係のその後の劇的な変化を遂げ、深い友情で結ばれるようになったことを振り返ってのことだろう。

ともあれ柳と吉田の関係は当初から柳の思想や実践に対する共鳴があったわけではなく、対抗意識に加え、多少の冷やかし、敵がい心すら抱いていたようである。式場隆三郎や吉田璋也、田中豊太郎らのちの民藝運動の中樞を担う人々が当初から柳に対して崇拝に近い感情をもって接していたのと対照的である。吉田と柳が急速に友好関係を深めるのは、柏崎における木喰仏調査への協力以降のことになる。

5. 吉田正太郎における「余技」

吉田が崇拝者の立場に留まらないのは、独自の価値観を保持していたからである。吉田は地方文化における「余技」の重要性を訴えており、それが中央（柳）への対抗意識として表れていると考えられる。

1921 年 8 月 25 日、越後タイムスは自社主催で「余技展覧会」を柏崎で開催している。この展覧会は柏崎の文化人や富裕層の人々が自らの手で作成した陶芸や書画、手工芸、写真、あるいは所蔵する工芸品などを持ち寄って展覧するというものであった。いわば柏崎人士の本業から離れた趣味的余技やコレクションを披露する場であった。この展覧会については開催前後の『越後タイムス』紙上で盛んに報じ

られ、また参加者、観覧者からの感想文なども掲載され、大変好評であったことがうかがわれる。

これらの一連の記事の中で異彩を放っていたのは、吉田正太郎の「越後タイムス社の展覧会其他」という意見文であった。

吉田はまず、地方では専門的職業として工芸の制作を本業にできる者は少なく「実際田舎には種々の事情上本職はあり得ない」ことを指摘し、多くの工芸品はみな本職とは別に余技、すなわち「飯の種にして居ない者の作品」、として制作されるものであることを述べている。その上で、吉田は、

タイムス社が此度の展覧会には最初から一ツの考へがある。それは中央の真似でなく地方的な而して独立した展覧会をやって見たい事、それをやるには地方の素人の細工品の展覧会をやる外他に方法はなく、地方の素人の細工品も指導者に其人さへあれば、慥かに存在の意義と、権利のあるものだ云ふ事である。

と述べる。本業としては成立しづらい地方の素人による制作を陳列してみてもどうか、と工芸の生産原理が地方と中央とでは異なっていることを示すことがこの展覧会の趣旨であると説明している。

吉田は、素人は本職とは異なり「興に動かされて仕事を始め、やり度い丈けやって厭になったらサッサと罷めてしまっても一向差支がない」のみならず、「専門が無い為めに常に何でも平均に目を通して居て其方面頗る自由がある」と素人仕事の優位性を主張する。厭になったらやめて良いというところに富裕な旦那衆の発想が垣間見られるようにも感じられる。

だが、それ以上に重要なのは、吉田が同文中において、茶雑巾でも座布団といった日用品でも誰でも気に入ったものを求めるはずであるが、「今日程作者も需要者も自分の気持を尊重してゐない時代はないやうに思はれてならない。セト物でも塗物でも日に日に悪くなって行くのを見ても解る」と同時代のものに対する風潮に警鐘を鳴らしている点である。

そして、「小芸術（英語から来た言葉）と云ふ言葉がある。必ずしも形の大小を以て芸術と小芸術を区別するのでは勿論ない、素人の余技は小芸術でなければならぬ」という。

吉田が、モノが日に日に悪くなっている、作者も

使用者も自分の気持ちを尊重していないなど、民藝論にも通底するような近代批判的な思想をこの時点で示している点が興味深い。吉田の認識では職業的に行う仕事とは異なって、小芸術としての余技は作り手に満足や自由を与えるものであり、それが日用品の美的感覚と結びつくものとして捉えられている。

かつ、当時の制作品が日に日に粗悪になっていることも指摘している。小芸術を英語から来た言葉と認識している通り、吉田はすでにウィリアム・モリスの lesser art を受容し、日常的に生み出される工芸品にも別種の美を見出している。その美を生み出す制作こそ、「素人の余技」であると吉田は考えるのである。

吉田はペリー関連のコレクションや、泥絵、大津絵などのコレクターとしても知られ、自宅収蔵庫を黒船館と名づけて時折その収蔵品を公開していた。また本業である呉服店経営の一方で自ら筆をとり、焼き物に絵付けをしたり、書、篆刻をして数々の作品を残した。その腕前は、吉田の喜寿を記念して1963（昭和38）年に柏崎信用金庫会場ホールを会場に、柏崎日報社・越後タイムスを主催者にして「吉田正太郎余技展」が開催されたほどである。それらの作品は写真に収められ前出『瓢亭余技帖』⁽⁵⁾にまとめられている。吉田は自らの制作を本職ではない素人の「余技」としてこだわった。

また、「余技」とは素人による単なる趣味の領域を超えたものでもある。事実、吉田正太郎が「余技」の版画でデザインした花田屋呉服店の包装紙は1954年にオール新潟県包装紙コンクールで第一位を受賞し、日経新聞で紹介されると全国から包装紙の発注が殺到したということもあった⁽⁷⁾。

吉田は本職が行う制作に対する素人の「余技」を決して軽視せず、特に地方社会に生きる人々にとって、余技的に人々が制作に携わることがその地方の生活美学、すなわち日常生活を美しいものにしようとする指向に対して大きな役割を果たすことを強く認識していた。吉田はそのようにして自らの余技を追求しつつ、それを趣味として地方文化人との交流の糧としながらも、実業においても応用して積極的に活用していった。その背景には、分業制の発達した都市社会における制作のあり方とは異なる、地方での制作とは何かということへの問いと、そこから導き出された地方社会の在り方に対する吉田の思想がある。

このように見てくるならば、柳宗悦の民藝論との違いが浮き彫りになる。民藝論における、おおむね経済的にも知識的にも貧しい存在でありつつ、宗教的な帰依にも似た手仕事へ埋没した人生を送る存在である職業的工人と、吉田のいう地方の余技的趣味人とは、いずれも手仕事によって制作する民衆ではあっても異なった存在であると理解できる。地方社会に生きる吉田にとって、生活を美しくするのは、地方の素人が余技的に行う趣味の世界なのであり、分業を十分に進めることのできない地方で生きる文化人であるが故の発想である。柳がイメージする民藝を生み出す人々とは隔たった存在なのである。柳と吉田の出会いをたどると、彼ら二人の間にある民衆による手工芸のあり方に対する考え方の差異を読み取ることができる。

6. おわりに

すでに紹介した通り1923年柳が佐渡からの帰りに柏崎に立ち寄り吉田を訪問した。同年8月19日付書簡において「貴兄が中々の議論家である事は意外でした」と書き送っている。議論の内容は不明だが、それまで吉田が抱いて居た中央（柳）に対する対抗意識や敵がい心の一部を見せたことも想像される。そして、吉田の「回想を語る」では「感傷屋の私『モット早くお会いして居たら……』と言った。すると柳氏『そんなにキバラなくともいゝぢやないか』』というある種の和解があったということも伝えている。その後柳から木喰仏の写真を見せられ感動し、以降柳の新潟県での木喰調査には全て同行したという。地方文化人としての吉田が中央の柳に対する対抗意識を持ちつつも、直接面会を果たし対話をかわす中で次第に打ち解けていった様子がここから想像できる。

昭和に入って柳宗悦は同志や共鳴者、支援者の輪を拡大しながら、民藝運動を全国に展開していった。民藝運動は、柳宗悦を頂点としつつ、民藝思想の共鳴者たちが運動を支え、徐々に全国に拡大していった運動であるが、その中にあって吉田正太郎はこの組織の中に位置付けられない独特の存在であったといえる。

ただしそれは吉田が民藝運動と距離を置いていたということの意味しない。民藝運動発足と同時に寄付をしたのも吉田であったし、『越後タイムス』に柳の思想の発表の場を与えたのも吉田であった。柳によれば民藝思想の「草稿」として書かれた「下手

ものゝ美」が、「雑器の美」と改題され、その後の柳の民藝論集に収録され、『工藝の道』などの民藝美論の基盤となっていたことを鑑みれば、民藝運動に果たした吉田の役割の大きさは計り知れない。吉田はむしろ民藝運動のその開始前夜から支えた陰の功労者と言っても良いだろう。

一方で、第4節でみた通り、彼らの出会いはそれほど“熱い”ものではなかった。柳シンパであった式場隆三郎らとは対照的な関係である。例えば、式場は『越後タイムス』1926年6月13日・20日の2回に分けて「柳さんのこと」という一文を掲載し、そこで柳宗悦を教祖のように崇拝していることを熱く語っている。

式場らが『白樺』に熱中した医学生であり、憧れの存在として柳を見ていたのに対し、若き日の吉田の姿は、中央に対する対抗意識を燃やす地方文化人である。吉田は地方の民衆の「余技」から生み出される文化を高く評価し、中央中心の文化的ヒエラルキーに抗した。柳の民藝論と対立するわけではないものの、彼らの価値観は確かに差異を見せている。吉田は、一方では柳と対立した北大路魯山人とも交流をもっている。このような柳一辺倒、民藝一辺倒にならない吉田の自由さの背景にはこの差異が存在しているといえるのではないか。

このような吉田の価値観を象徴するのは版画家川上澄生との交流であろう。川上澄生は木版画など2,000点以上の作品を残した戦前戦後に活躍した版画家である。棟方志功に影響を与え、萩原朔太郎『青猫』、佐藤春夫『魔女』などの装釘画も手がけた。

森谷美保⁽¹⁰⁾が明らかにしたとおり、川上の版画に魅せられた吉田は1935年から亡くなる1970年まで膨大な量の書簡をやり取りした。現存する川上から吉田に宛てた書簡は750点にのぼる。川上は多くの作品を吉田に贈っており、現在の黒船館は400点の川上コレクションを所蔵する。森谷によれば、吉田はいわばパトロンのように見えるかもしれないが、

川上は金銭の見返りとして作品を贈っていたわけではないし、一方の吉田も多くの作品を送付し、金銭的な援助をしたことはあっても、川上に対して優位な立場で接していたわけではない。お互いに清廉な人柄であったからこそ、30年以上にわたって変わらぬ関係を保ち、その交流により、代表作を含む多くの川上作品が黒船館に所蔵されたのである。

という。川上の本職は学校教員であった。吉田と知り合った時は栃木県の中学教師である。川上の版画制作はいわば吉田のいうところの「余技」として行っていたものである。吉田は川上のこの余技性に惹かれたのではなかったか。ゆえに川上に対し終生の友情を維持し、物心両面から支援し続けたのではないか。

民藝運動は地方伝統文化への新しい価値観を提示した文化運動であり、現在社会においても有効な視点を提示し続けている。その一方で吉田正太郎の思想を対置してみるならば、地方に生きる人々にとっての地方文化、その担い手の存在、消費者をどのように捉えるのかという問題に対する別の視座が得られるのではないか。民藝運動や地方文化振興を検討する上で、吉田正太郎の思想はさらに検討される必要があると考える。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、吉田正太郎のご遺族である吉田直一郎氏に情報提供と資料閲覧の便宜をいただいた。感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 梶谷崇：柳宗悦「彼の朝鮮行」と柳兼子独唱会、北海道科学大学研究紀要、49、29-36、2021
- (2) 志賀直邦：民藝の歴史、ちくま学芸文庫、2016
- (3) 岡本浩：柏崎文人山脈、柏崎ゆかりの文人展実行委員会、2000
- (4) 柏崎市編：柏崎の先人たち 柏崎・刈羽の人物誌、柏崎市、2002
- (5) 吉田正太郎：縹亭余技帖、花田屋呉服店、1963
- (6) 伊藤助右衛門：「光化門について」、民藝、103、47-48、1961
- (7) 吉田直太：父のこと（上・下）、越後タイムス、1971年6月13日・20日
- (8) 吉田直太：柳師の父・正太郎—往復書簡と木喰仏調査のころ—（上・下）、越後タイムス、1989年10月8日・15日
- (9) 桑山太市：花田屋さんのこと、柏崎日報、1971年6月8日
- (10) 森谷美保：黒船館主吉田正太郎に宛てた川上澄生の書簡——吉田との交流により創作された川上作品、文明開化を描いた版画家 川上澄生展 図録、16-23、2009